

稲盛哲学の発展と可能性

奥 健一郎 [(鹿児島大学稲盛アカデミー教授)]

Development and Potential of the Inamori Philosophy

OKU Kenichiro [Professor, Kagoshima University, Inamori Academy]

キーワード：稲盛、経営、心、倫理、哲学

I はじめに

1. なぜ稲盛哲学は必要なのか？

京セラとKDDIという二つの大企業を創業し、現在、日本航空の立て直しに尽力している稲盛和夫氏（以下、稲盛と略す）は、今日、我が国で最も注目されている経営者の一人である。京セラグループの連結売上高は1兆円を超え、KDDIのそれは4兆円に迫らんとし、単純に合わせても約5兆円の売上高を計上している。2つの異なる業種の企業を立ち上げ、且つここまで発展させた例は全くといっていいほどなく、現在、稲盛の経営に学ぶ盛和塾は内外合わせて61塾、約6000名弱の中小企業の社長が集う勉強会となっている。

その経営の特色を一言でいえば、「人間の心の在り方に徹頭徹尾焦点を当てる」ところにある。すなわち心にないものは現象化せず、ゆえに経営においても、そのかじ取りとなる経営者の持つ哲学が最も重要であるというのである。これは、いわゆる企業倫理でいわれるところの「倫理観の遵守」といったことをも含みながらも、それ以上の重大な意味を持つことに注意しなければならない。すなわち、起業が永続していくためには、ライバルを陥れるような振る舞いや策など全く考える必要もなく、ただただ「人間として何が正しい行為なのか」という点に立脚して経営を行うことによってそれは完全に達し得る、というのである。

この稲盛の主張は、いわゆる欧米流のビジネススクール的手法に習熟した経営者から見ると、一種奇異に映るようである。中には、「自分が成功した後だったら何だって奇麗事は言える」「所詮は、自分を聖人化するための主張に過ぎない」と揶揄する者もいないわけではない。しかしながら、稲盛の足跡と、彼の企業の歴史を詳細に辿っていくと、そこには稲盛の終始一貫して変わらない経営フィロソフィが今も脈々として流れており、そして今日においてもなお、それを最重要視した経営が徹底されていることがわかる。

従って、この点に鑑みると、昨今のおびただしい企業の不祥事や一連の世界的金融危機の原因は、まさに稲盛がいうところの「正しい倫理観・強い道徳観を備えた利の追求」「利他主義の経営」が為されなかったがための結果である、という主張が、大きく際立ってくることになる。数年前に、ハーバードビジネススクールの講義「Great Business Leaders」において取り上げられた、ウォルト・ディズニーやビルゲイツ等々15人のビジネスリーダーのケースメソッドにおいて、学生から稲盛は、インドのタタに次いで2番目に評価された点

や、中国においても稲盛の著書がロングセラーになっている事実などは、国を超えて稲盛の経営フィロソフィが求められていることのひとつの現れであるともいえる。

ただし、時に稲盛の主張は人間の魂や輪廻転生にまで、実に広範に及ぶので、その理解については注意を要する。また、稲盛自身それを盛和塾でも講演し、著書の中でもしばしば触れているがために、いささか宗教的に過ぎると揶揄する向きもあるが、この点、稲盛のフィロソフィを理解するには、その全体を把握することが必要である。いわばその全体たる「球体」から各論を理解する、ということが不可欠なのである。

一例を挙げると、稲盛が体系化した京セラフィロソフィの第34項目は、以下のようになっている。

34. バランスのとれた人間性を備える

【バランスのとれた人間とは、何事に対しても常に「なぜ」という疑問を持ち、これを論理的に徹底して追求し、解明していく合理的な姿勢と、誰からも親しまれる円滑な人間性をあわせもった人のことをいいます。いくら分析力に合理的に行動を貫くスマートさを備えていても、それだけでは、まわりの人々の協力を得ることはできないでしょうし、逆にみんなからいい人だといわれるだけでは、仕事を確実に進めていくことはできません。私たちが素晴らしい仕事をしていくためには、科学者としての合理性とともに、「この人のためなら」と思わせるような人徳を兼ね備えていなければなりません】

これは、科学的な合理性と豊かな人間性をあわせもち、かつ、そのどちらも偏らないバランスが必要であるという意味です。・・・(中略)昔、営業の連中が外回りから帰ってきて私にその日の報告をする中で、「いや、この件は難しいのです。私にもわけがわかりません」などと理屈にならない説明をする者がいると、私はこっぴどく叱ったものでした。

私は、盛和塾で形而上学的な、精神的な領域の話をよくします。そのくせ、会社経営、営業活動、または研究開発において、不可思議な発言は一切許しません。わけのわからないことがあっては困るわけで、起業活動のあらゆる問題は、すべて理屈で証明できるはずなのです。また、証明できないようでは話になりません。そこへわけの分からない話を持ちこんでくるとは、とんでもない話です。ですから、昔は会議の席などで、「バカなことを言うな！全部科学的に割り切れるはずだ」と、よく怒鳴ったものでした。

そのようにして科学的に考えるタイプの間人は、とことん理屈で割り切ろうとします。「死後の世界とか、仏の世界とか、そんなわけのわからない話が信じられますか。私は説明のつかないものは信じません」というわけです。

私の場合は、会社で仕事をし、また研究をする世界ではとことん合理主義であり、絶対に不可思議なことは許さない。ところが、一歩会社を離れば、その大局にある仏の世界など、精神的な領域をも信じられる。

問題になるのは、そのように対極にある二つの人間性がバランスを失っている場合です。仏の世界に没頭し、形而上学的、宗教的なものに傾斜すると、それを経営の場にも持ち込む人がいます。極端な博愛主義で指導をするコンサルタントもいるようですが、これはとんでもない話です。私は経営論においても「利他」の重要性を説いていますが、これにはちゃんと合理性があるからお話しているのです。

ビジネスの世界では、徹底した合理主義者、しかし、それ以外ではロマンチストであり、形而上学的な話も考えられる人間でなければなりません。この両面のバランスがとれていなければ、一流の経営者にはなれないのです。」⁽¹⁾

この稲盛の徹底した合理性の編み出したものが、「実学」と呼ばれる独自の会計学であり、またアメーバ経営であることは論を待たない。また、電電公社改めNTTとなった、いわば親方日の丸のガリバー企業に対しても果敢に挑戦しKDDIを創り上げたベンチャー精神など、そのフィロソフィには多面的なものがある。その全体を全て把握した上で各論を学ぶという姿勢がないと、稲盛の経営フィロソフィを真に理解したとは言えないのである。稲盛自身、経営戦略等の必要性や合理性は十分把握しながらも、なおかつ、徹頭徹尾人間の心に焦点をあて、そのあり方こそが企業の行方を決定づけると強烈に主張する。稲盛の合理性から生み出された会計学やアメーバ経営にしても、これらと彼の経営フィロソフィが、いわば両輪となり相まって、初めて機能するものなのである。

以上の点に鑑みれば、経営者の心を高めることの重要性を説く稲盛の主張とそれを反映した経営手法は、彼自身がその姿勢を貫いた上で二大企業を築いたという「厳然たる結果」を出している以上、また昨今の企業倫理の重要性からしても、世界的に最も求められるものの一つとなる可能性は十分にあると思われる。

2. 稲盛哲学は世界へ浸透するか？

欧米のビジネススクールにみられる経営手法は速いスピードで世界中を席卷したが、いうまでもなくそれには理由がある。では、稲盛哲学が同様に全世界に浸透し、本当の意味で世に受け入れられるかということ、それには“NO”と言わざるを得ない。ビジネスにおいても、それが優れた商品だからといって、顧客に必ずしも受け入れられるとは限らないのと同様である。

何故か — それは、稲盛が最も重要視する人間の心というものが、極めて漠然とした、とらえどころのないものであるからに他ならない。

経営とは遊びではない。自らの指針となり拠り所の根本となるものが、曖昧でとらえどころがなく、従って扱いにも困るようでは、その様なものに絶対的な信頼など、通常は置けるはずもないのである。

この点、ビジネススクールの手法には極めて合理性があり、単に一時的利益を上げるという観点から観れば、ある意味、理にかなったものであるといえる。明確な経営戦略を立て、資源を配分し、優秀な人材を抜擢する。周到なりサーチを行い、顧客のニーズに合うと思われる商品を開発し、マーケティング戦略を構築する。それでも予期せぬ事態が起きた場合は、人材を文字通り「材」とみなし、解雇することで人件費を削減し、速やかに事業を立て直す。これにより得た利益は、会社の経営方針を決する株主に優先的にまわす。こういったマネジメント上の明快さが、ひろく世界に広がった大きな要因の一つであることは否めない。

しかしながら、こういったやり方は深刻な雇用問題を生み、さらには株主への配当のためなら何をやってもいいという企業倫理の欠如へと繋がっていったのである。その結果、銀行や証券会社を含む企業においても、不祥事が世界中で後をたたないのが現状である。

そこで、「戦略を遂行するの様々な手法を行うのも所詮は人間であり、ゆえに組織にお

ける人間性というものが問われる。特にリーダーの役割は重大である」という、いってみれば極めて当たり前のことに彼らも改めて気づくこととなり、ゆえに昨今のビジネススクールにおいても、リーダーシップや企業倫理がさかんに取り上げられるようになった。これらは単なる道徳論の枠を超え、今や経営学の一分野になっている。しかしながら、それでも稲盛のように徹底して心に焦点をあて、彼が「心を高める、経営を伸ばす」というように、心の高邁さと経営の伸びとはパラレルな関係にある、とまで主張することはほとんどない。

そこで、経営上計り知れない実績を出した稲盛の経営に普遍性を持たせるためには、やはり、なぜそういうことができたのか？という問いに対して、心の現象に最大の重きを置いている以上、その根拠を、科学と哲学の両面から構築していく作業がどうしても必要になってくるのである。確かに稲盛が生きている間は、その警咳に接し、あるいは質疑応答を通じて、その経営の何たるかを理解することは可能である。しかしながらそのままでは、やがて彼がいなくなった後、心の経営の何たるかを誰も説明できないこととなる。さらには、今日もなお唯物主義が全世界の中心的な見方である以上、その主張は、欧米のビジネスリーダーにも説得力を持つ普遍的なものとはなりにくい。ゆえに、稲盛哲学が世界に浸透し、且つその普遍性を認知させるためには、このアプローチが不可欠となってくるのである。

むろん、科学と哲学の両方が発達性のものであり、さらには今まで正しいとされてきたことが実は違っていたとなる可能性もある以上、それらはいわば、「相対的真理」であることは否めない。ゆえに、これらを絶対的なものとし迷妄するのは危険である。しかしながら、これらの目的も真理の探求にあり、かつ客観性に長けた論法である以上は、稲盛の重要視する心の経営を論拠づけるものとして、非常に有効であると思われる。

3. 稲盛哲学論拠構築へのアプローチ

この点、車椅子の物理学者として世界的に著名なスティーブン・ホーキング博士は、その著書『宇宙のすべてを語る』の中で、稲盛哲学の理論的根拠を構築するに当たり重要な示唆を与えている。

「科学の最終目標は、全宇宙の事象をすべて説明することのできる一つの理論をもたらすことです。しかしながら、それが非常に困難であることは明らかです。私たちは、その代わりに、問題を細かく分割し、部分的な理論を作りだしてきました。これらそれぞれの部分的な理論は、観測された事実のうち、ある限られた事象についてのみ説明したり予測したりすることはできますが、それ以外の要素がもたらす影響は無視するか、単純な数字として表します。おそらくそのアプローチは完全な誤りでしょう。もし、宇宙に存在するすべてがお互い根本的に依存しあっているならば、他と切り離して、問題の一部のみを調べることで、完全な解決策に近づくことは不可能なはずだからです。」⁽²⁾

稲盛の哲学は、人間と心、心と宇宙の関係、さらには宇宙の在り様にまで及び、その範囲は広大である。そして、その意図するところを要すると、ホーキング博士がいうところの宇宙の真理を探り、それに順応して経営も行うべき、ということである。ゆえに、単に広大というだけでなく、非常に深遠なものである。そのために万巻の書を読んでも、それらは博士のいうように一面的なアプローチに過ぎない。それらは稲盛の主張の正しさの証明の一部に

はなっても、それらがいつしか合理的集積を生み、統一的な真理の高みに昇華するには、膨大な時間を必要とする。

この点に鑑みた場合、稲盛の際立った特色として挙げられるのは、彼が単なる経営者の枠を超えて、自分なりに考え抜いた宇宙の真理を、哲学と科学の両面から、自ら検証してみようと果敢に挑戦していることである。それは、稲盛自身が盛和塾で語る内容や、著書の中にもかなり散見される。そこで本稿では、稲盛自身が創業した企業は単に成功したというだけでなく、今日においてもなお隆盛を「続けている」という厳然たる事実から、そこには何らかの真理ないしは普遍的法則があると、最初に仮説を立てることとする。そして、本人自身がそれを哲学・科学の両面から考察して、「どうもこうではないか？」と述べていることを手掛かりに、その仮説を科学・哲学の両面から検証していくこととする。

II 量子論と稲盛哲学

1. 神とは何か？

神を定義することは困難を伴うが、稲盛が、経営の営みを通じて宇宙の真理を模索している以上、これは避けられない課題である。

稲盛は言う。

「宇宙の生成は、150億年ぐらい前かに素粒子の塊が大爆発したことに始まる、というのが現在の物理学の説くところです。この大爆発は、「ビッグバン」と呼ばれていて、一握りの超高温超高压状態の素粒子の塊がビッグバンの後膨張し続けて現在の宇宙に至ったというわけです。

地球一つの質量も大変なものですが、その33万倍もある太陽があり、その太陽を中心に太陽系が構成されている。また太陽と同じような恒星を1000億個含んだ銀河系がある。そして、銀河系に匹敵する規模の銀河が宇宙には無数にあるというのですから、想像を絶するとてつもない質量をもった存在が宇宙に広がっていることになります。しかし、その始まりはひと握りの素粒子の塊でしかなかったのです。そしてこの宇宙は現在もまた膨張を続け、刻々と広がっているといわれています。

宇宙を作っているおおもとである素粒子は、現在、何十種類もあるといわれていますが、物理学の世界では、究極の素粒子に集約できるはずだとして、さらに究明が続けられています。

その素粒子が集まって最初にできた原子は、水素原子だと考えられています。太陽は主に水素の塊で、その水素原子の核融合により燃えているのですが、宇宙にはこのような水素を主体とする天体はたくさんあります。

ビッグバンのときに、素粒子が複数個結合して陽子を作り、さらに複数個の素粒子が結合して中性子を作り、さらに複数個の素粒子で中間子を作り、この中間子の力で陽子と中性子が結合して最初の原子核を形づくり、その原子核の周りに素粒子の一種である電子がトラップされて、最初の原子すなわち水素原子が生まれたと考えられています。

そして、その水素原子同士の原子核が結合するという核融合反応を起こすことによってへ

リウム原子ができ、さらに次から次へとこのような核融合が繰り返されることによって、それ以上に質量の大きい原子が生まれ、現在の宇宙を構成し、また現在の周期表にある各種の元素が生まれてきたと現在の物理学では考えられています。

こうして宇宙が形成されてくる経過を、私は「進化」といってもよいと考えます。

「進化」というと、おもにダーウィンの唱えた生物を対象とする「進化論」を意味し、無生物の進化については誰も触れていません。そして一般には、無生物は変わらないと思われています。しかし、初期の宇宙では、先に述べたような「無生物の進化」が急激に起こっていたと考えてよいと思います。

では、どうしてこの進化が起こったのでしょうか？つまり、ビッグバンによって素粒子が素粒子のままではなく、なぜ陽子、中性子、中間子をつくり、それらがなぜ結合して原子核をつくり、そこへなぜ電子がトラップされて水素原子を構成しなければならなかったのでしょうか。さらに、その水素がなぜ核融合し、ヘリウムを生み、その後もいろいろな元素を作り出したのでしょうか。

この問いに対しては・・・(中略)・・・私は、法則があるというよりは、宇宙には森羅万象あらゆるものをあるがままに存在させるのではなく、それが生成発展させるような進化をうながしていく流れがあるというふうに理解しています。つまり、無機物的な法則というよりは、宇宙にはすべてのものを生成発展させ、進化をさせていく「意思」があるというふうに考えた方がよいと思うのです。

これは、多くのひとたちに理解してもらいやすくするために、擬人的な手法でいっていますが、もしそういう捉え方が嫌いな方は、宇宙にはそういう法則があると理解されてもいいと思います。

つまり、ビッグバン後、宇宙には素粒子しかなかったにもかかわらず、そこから各種原子が生まれ、原子が結合して分子が生まれ、その分子が宇宙を構成する多くの無機物を形作り、さらには生命を宿した生物が生まれ、現在のような人類という高度な進化を遂げた生物までを含む宇宙を創り上げていった。無機物の進化、生物の進化、すべてのものは、あらゆるものを生成発展させていこう、進化させていこうとする宇宙の法則、宇宙のなせる業であると私は理解したのです。

それが進化をうながし、その進化のなかで素粒子が集まり原子ができ、分子ができ、のちに高分子ができ、蛋白質が生まれ、それによってDNAが構成されて生命というものが誕生した。生命が誕生したあとも、進化は続いて途切れることがない。

このように、すべてのものを発展する方向へ動かしていこうとする宇宙の意思が、われわれ生物にも、石ころにも存在しているのです。いわば、宇宙の意思が、すべての源になっている。そう考えてもよいのではないかと思います。

このことを、悟りを開いた賢人たちは、「宇宙には愛が偏在している」というふうに表現しました。つまり、一木一草すべて、道端の石ころ一つのなかにも、愛—宇宙の意思—が存在しているというのです。

また、お釈迦様は、「すべてのものには仏が宿る」という言葉で語っています。

仏とは悟りを開いた状態のことで、言葉を換えると真智、真如、真我となります。この真の智慧の根源なるものがすべてに宿るといっているのです。このことを「山川草木悉皆成仏」と、天台宗の教義では説明しています。山も川も草も木も、あらゆるものはみな悉く仏なり

ということです。」⁽³⁾

この稲盛の主張をさらに深く掘り下げてみる。真空というと、今までは文字通り何もない世界だと思われてきた。宇宙空間などは、その代表的なイメージだったともいえる。しかしながら、量子論でいえば、完全に「無」の空間などあり得ない。すなわち、真空とは何もない空間ではなく、エネルギーが満ち満ちていて、波立っている状態なのである。そこから素粒子が常に生まれており、その素粒子は、プラスの陽電子と電子のマイナスが必ずペアとなって、常に、対生成、対消滅という動きを繰り返しているのである。このプラスとマイナスがペアとなって動く流れこそが、東洋哲学が説くところの陰と陽の源であり、さらには男性性と女性性の源であると考えられる。ただその動きが速いため、今まで何もない空間だと考えられていたのである。そして、その動きが一度だけ、素粒子は出てきたけれども消滅しなかった瞬間こそ、ビッグバンの始まりであるといわれている。その素粒子が、やがて星や銀河を形成していくこととなる。一方、エネルギーを大量に放出した真空は、エネルギーの密度が下がったとされている。そしてこの空間を満たしているのが、いわゆるダークエネルギーであり、全宇宙のエネルギーの約73%は、このダークエネルギーだといわれている。

さらに、今日の量子力学者が取り組んでいる理論に、「超統一場理論」がある。この世界には、「電磁気力」「重力」「強い力」「弱い力」という4つの基本的な力が存在するが、この4つの力を統一することで、宇宙も物質も生命体も、元々はとてつもないエネルギーから誕生したものであり、元々は同じだったことを証明しようとする研究である。稲盛のいう、最終的にそれを為した宇宙の意思・法則を解明するものとして期待されている。

以上、稲盛の主張を補足したが、この宇宙の生成に万物の創造主を見出そうとする稲盛の姿勢は、世界の神仏観を根底から覆すほどの説得力を持っている。神をこの世の創り主、すなわち万物の創造主と定義すれば、この宇宙の意思と愛に満ちたエネルギー、法則こそが「神」であるからである。ゆえに、そこから生まれた人間や動物、植物、鉱物等々、すべてのものは「神の子」であるからである。ゆえに、万人がその神性の光を持っているのにもかかわらず、知らずに黒い布をかぶせて運命を嘆く人は、すべては自分が招いた仕業であることに気付く必要があるのである。

もはや人類は目覚めなくてはならない。

キリストが神だ、仏陀が神だ、いや、アラーが、ヤハウェが神だと主張し、いがみあい、挙句の果てには殺し合い、爆弾を落とし、罪もない人まで大量殺戮する時代に、今こそ人類は終止符を打たなくてはならない。

彼らが何を主張したか — キリストは隣人愛を説いた。釈迦は慈悲を説いた。孔子は仁を説いた。マホメットはアラーを通じて、万人の平等を説いた。モーゼの十戒も、その説くところは、愛ある行いの実践である。

その根底に脈々として流れるのは、みな神の「愛のエネルギー」そのものであり、「法則」そのものである。根本はみな、一緒なのである。

彼ら賢人が説いた場所は異なる。そこにいた人々も、そして文化や歴史も、みな異なる。ゆえにそれはちょうど、義務教育で教える大枠は学習指導要領でみな同じだとしても、各自の個性に応じて教え方を変える、あるいは、この子にはこの教科書で、この子にはこの参考書で教えた方がよかろう、ということと一緒になのである。たとえば、ある子供は先生から

「私を信じよ。信じてやってみなさい」といわれる。勉強ができるようになったら、その子にとって先生は唯一無二の尊敬する人となるかもしれない。だからといって、他の先生のことをダメだと決めつけることは間違っているし、その先生とて、他と全く違った内容を教えているわけではない。

彼ら賢人は神にも似た破格のエネルギーを持っていたかもしれないが、あくまで人間であったし、その前から万物は創造されていた。その意味で、彼ら人格霊を神よ神よと崇め奉り、その一方で他を排斥し、いがみあうようなことは、もうやめなければならない。

その意味で、稲盛の指摘は、世界平和を構築する上での、まさに「第一ボタン」であるといっても過言ではない。今こそ神を再定義し、人類共通の認識として腑に落とすことが肝要であると思われる。

2. 稲盛哲学を解明するカギ「量子論」

稲盛哲学の根幹を為すものとして、「人間の思考が、この世界の現象の一切を生み出している」ということが挙げられる。そうである以上、人間の心と、この現実世界に現れた物質との関係性が問われねばならない。この課題を解くカギが、相対性理論と双璧を為す、現代物理学の2大理論といわれる量子論（量子力学）である。

現代においても、人の見方・考え方というものは、唯物主義がその大半を占めると思われるが、では一体、彼らの好む「物質」とは何なのであろうか。そもそも、あれが欲しいこれが欲しいと羨むその対象となる物は、本当に我々が見る姿そのものなのであろうか。

たとえば最近では、いわゆる3Dの流行に伴い、玩具屋の売り場に出向くと、それに似た様々なメガネが売られている。あるメガネは、それをかけてライトを見ると、その周りに同じ光線状でドラえもん姿がでてくる。またあるものをかけると、ライトの周りにハートの形状をした光線が浮かび上がってくるのである。

いうまでもなくそれは、メガネが光自身の在り様を変えてしまったのではなく、人間の眼球にほんのわずかな工夫を凝らしただけで、光の見え方は全く変わってくるということである。また、太陽を観察すると通常は赤く見えるが、紫外線を使うと青く見える。軟エックス線のそれは、太陽そのものは見えなくなり、その周りに煙状のものがうっすらと浮かんでいるようにしか見えない。

すなわち、我々が今、目にしているものは、太陽の可視光線を前提として形成された大脳の視覚作用と眼球を通じて見ることのできる「一つの姿」に過ぎないのである。

では一体、物の実相とは何なのかというと、これらは、粒子が集まってできた、様々なsomethingという以外にないのである。このことが、般若心経の説く「空」、あるいは、禅の十牛図にいう「人牛俱忘」を理解する前提であり、これがないがために、我々は常に物欲に振り回され、人間の五感覚脳に支配された、感覚的な物の見方しかできないということになるのである。

そこでこの、物の実相・本質を理解するために不可欠となってくるのが、量子論（量子力学）なのである。

量子論とは、ミクロな世界の原子や電子、光といった、いわば「自然界の主演」にせまる理論である。今や量子論は現代の科学技術になくてはならない土台であり、これがなければ、半導体もパソコンも携帯電話も生まれることはなく、さらには、宇宙誕生のなぞも量子論が

解き明かすものと期待されている。

量子論の世界では、我々の常識は通用しない。量子論の父と称されるニールス・ボーアの言うごとく、量子論を理解するためには、常識にとらわれず、ミクロな世界の、一見摩訶不思議ともとれる現象を受け入れる必要があるのである。

以下、量子論における基本定理等を述べる。

(1) 波と粒子の二面性

量子論のいうミクロの世界では、光や電子などは、波と粒子の両方を「同時に」合わせ持つ。すなわち、その実体は、粒でもなく波でもない「別物の何か」である。ゆえに、これを正しい形で絵にするのは不可能である。

(2) 状態の共存

ミクロな世界では、一つの物が、同時に複数の場所に共存できる。これは複数個存在する、という意味ではないし、可能性が複数あるという意味でもない。そして、人間が観測した瞬間に、初めてどこにあるのかが確認できる（＝波束の収縮）。これについては、量子論の通説である、いわゆるコペンハーゲン解釈では、観測してどこで発見されるかは偶然に支配され、確率的にしか予測できないとする。これに対し、光子の存在を説明することでノーベル賞を受賞した、量子論の祖ともいわれるアインシュタインは、「神はサイコロ遊びをしない」といって激しく非難した。これについては後述する。

(3) 原子は常に動き、人間に反応する

物質の中でも安定しているといわれる金でさえ、原子顕微鏡でのぞいてみると、原子が物質のかたまりのふちで移動し、規則正しく再整列し、結合しているのがわかる。しかも、その原子は、人間の行動に反応して動く。たとえば、人間が手をたたいたり、会話をしたり、歩行したりといったことにも、それにあわせて原子は反応し、振動する。

(4) 観測した瞬間に、粒となって現れる

原子の構造は、原子核の周りに電子がまわっているというのは正確な言い方ではない。電子は通常、不確定な雲のような状態で原子核を取り囲んでいる（＝電子雲）。それが、人間が観測した瞬間に、その雲が消えて、粒となって現れる。ゆえに、雲の状態になっている電子を直接確認することはできない。このことから、「観測装置も原子からできているのだから、量子論に従うはずだ。だから、観測装置によって、波の収縮が起きるはずがない。収縮が起きるのは、測定結果を人間が脳の中で認識したときだ」とする説がでてきた。著名な『量子力学の数学的基礎』を著した物理学者、フォン・ノイマンは、人間が、自然や事物を認識する瞬間に、「波束の収縮」が起き、その位置や性質、値が決定すると主張した。これについて、量子力学の草創期の一人であり、波動力学を確立させたノーベル賞受賞者、エルヴィン・シュレーディンガーは、有名な思考実験「シュレーディンガーの猫」を考案し異を唱えたが、これに対する統一的解釈は未だ確立されていない。これについては後述する。

(5) 電子は壁をすり抜ける

量子力学上でいわれる「トンネル効果」と呼ばれる現象である。この効果は、質量は

大きくなるほど起きにくくなるので、我々の体が壁を通過することは通常あり得ないが、質量の小さな素粒子レベルであれば、容易に分厚い壁でも通過することができる。たとえば、可視光はガラスにぶつかると一部は反射するが、一部は通過する。携帯の電波が室内で届くのも、同じ理由による。

(6) エネルギーは物質化する

$E=MC^2$ とは、アインシュタインの相対性理論から導かれる式である。

Eはエネルギー、Mは質量、Cは光速を現す。この式を見ても、エネルギーから質量を持った物質を創り上げることができることがわかる。ゆえにエネルギーは「物質を生む素」といってもよい。

さらには精神もまたエネルギーの一種である。ゆえにエネルギー保存の法則により、人間は亡くなっても精神のエネルギーはなお残ることになる。脳細胞を含む体細胞が十年ほどで全て入れ替わるにもかかわらず、意識だけは替わらないというのもそうである。これを稲盛は「意識体」といっている。宗教的には魂とほぼ同じ意味であると稲盛は主張する。

(7) すべては「振動」である。

光を放出する原子や分子の振動のエネルギーは、エネルギーをE、振動数を ν （ニュー）とした場合、ド・ブロイの方程式 $E=h\nu$ で表すことができる。hとは、量子という考え方を初めて物理学に持ってきたマックス・プランクにより編み出されたプランク定数である。

この式からもわかる通り、すべては「振動」により成り立っている。電波や電磁波等はもちろんのこと、物質の最小単位を考える際に用いられる「超ひも理論」においても、物質の究極の最小の姿は、輪ゴムのような「ひも」が高速で振動していて、その振動数の違いによって、粒としての物質の種類が決まるのである。

感動こそが人を動かす、というのもそうである。振動で成り立っている人間のバイブレーションを増幅させるということである。稲盛の説く、京セラ経営12か条の屋台骨である第1条は、「事業の意義・目的を明確にする—公明正大で大義名分ある高い目的を立てる—」であるが、これも、感動ある経営を最重要視していることの現れである。

後述する中村天風は、このプランク定数を常に象徴的に用い、『宇宙の一切はこのプランク定数で成り立っている』とした。

以上、量子論の基本を中心に概要を述べたが、これらが理解できないと、稲盛が説く『心が一切を創りだす』という事を説明することはできない。コペンハーゲン学派を形成し、量子力学の父と称されるノーベル賞受賞者、ニールス・ボーアは、粒子と波の二面性、位置と速度の不確定性などの世界像を「相補性」と名付け、後半生には量子力学と東洋哲学に類似性があるとして東洋哲学を研究していた。ボーアは、「原子物理学論との類似性を認識するためには、われわれはブッダや老子といった思索家がかつて直面した認識上の問題にたち帰り、大いなる存在のドラマのなかで、観客でもあり演技者でもある我々の位置を調和あるものとするように努めねばならない。」とも言っている。科学と哲学とは、決して相反するものではないのである。

よく理工系の学生から、「同じ準備をして同じ実験をやっているのに、結果が違うことも往々にしてあります」ということを耳にする。ボーアは、装置を用いて実験を行う際の、人間の意識が非常に重要であり、そこから、人間の意識こそが現実世界を創造する、ということに思いあたったのである。「勝負は時の運」とはよく言われることであるが、これすらも偶然ということはある。最終的には人間の意識が決定づけている、ということなのである。

以下、この量子論を中心に、稲盛哲学の核を探求していくこととする。

3. 波動方程式が意味するもの

シュレーディンガーの波動方程式は、以下の要素で表される。

i: 虚数 現実にはない数字、はかれない数字。

※式の説明では、「実在しない」という表現を用いた。ここでは、推し量れないという程度の意味。

心や精神は測ることのできないものなので、i、即ち虚数で表現される。

ħ: プランク定数を2π (π: 円周率) で割ったもの

Ψ: 波動関数を現す

H: その波動の持つエネルギーを計算するもの。演算子。

$\frac{\partial}{\partial t}$: 時間で微分する。瞬間的な変化量を現す。

シュレーディンガーの波動方程式とは、

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \Psi = H\Psi$$

アインシュタインの弟子である物理学者、デビッド・ボームは、この波動関数Ψを、実数部分と虚数部分に分けて、物質は波でもあり、且つ粒子でもあることを証明した。これにならって、今、波動関数Ψを、実数と虚数に分け、 $\Psi = A + iB$ とする。すると、先ほどのシュレーディンガーの方程式は、

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} (A + iB) = H(A + iB)$$

左辺は、

虚数 × (『実在の波＝物質の波』の変化量 + 『実在しない波＝精神の波』の変化量)
で現される。

右辺は、

(実在の波のエネルギー＝物質の波のエネルギー) + (実在しない波のエネルギー＝精神の波のエネルギー)

で現される。

左辺に虚数がついており、これによって、左辺は、物質の波の変化量は虚数、精神の波の変化量は実数であることがわかる。(※ $i^2 = -1$)

$$-\frac{\partial}{\partial t} B = HA$$

$$\frac{\partial}{\partial t} A = HB$$

ゆえに、この式から、

精神の波の変化量＝物質の波のエネルギー

物質の波の変化量＝精神の波のエネルギー

という結論が導き出される。

自らの精神を奮い立たせることによって、初めて物質界は変化するのであり、また、地上界の物体に何らかの変化の起きている状況こそ、目に見えない精神的なエネルギーの発生する時である、ということが言えるのである。⁽⁴⁾

4. 「シュレーディンガーの猫」と稲盛哲学

前述した、「シュレーディンガーの猫」と通称される思考実験とは、以下のようなものである。

今、中の様子がわからない箱の中に、1匹の猫と毒ガス発生装置が入っている。毒ガス発生装置は、放射線の検出器に反応して作動するように設置されており、検出器の前には、放射線を持つ原子を少量だけ含む鉱石を置くこととする。放射線を持つ原子とは、ウランやラドンなど、原子核が崩壊して放射線を出す原子のことである。これだと、原子核が壊れて装置が放射線を検出すると、毒ガスが発生し、猫は死んでしまう。つまり、原子核の崩壊と猫の生死が連動しているわけである。

この場合、当然ながら、原子核の崩壊も量子論に従う現象である。すなわち、コペンハーゲン解釈によれば、原子核がいつ崩壊するかは、確率的にしかわからない、ということになる。そして、崩壊したかどうかを観測するまでは、原子核は、崩壊した状態と崩壊していない状態は共存している。

そして前述した、「波束の収縮が起きるのは、測定結果を人間が脳の中で認識したときだ」とする解釈をとれば、原子核が崩壊したかどうかは、観測者が窓を開け、中の猫が活着しているかどうかを観察するまでは決まらないことになる。そうなると、観測者が中をのぞくまでは、猫は死んでいる状態と活着している状態が共存しているということになってしまうのである。ゆえに、シュレーディンガーは、そのような解釈は、「半死半生の猫」というばかげた存在を許してしまうと強く批判した。この点、コペンハーゲン解釈では、「マクロな物体」である放射線検出器が放射線を検出した段階で、原子核の波束の収縮が起き、原子核の共存状態は崩れると考える。原子の共存状態が崩れるため半死半生の猫もあり得ないこととなるが、「機械による観測で収縮が起きる理由は何か」といった問題は解決されておらず、統一的解釈は未だなされていない。

これについて、近年有力な学説となっているのが、コペンハーゲン解釈に対する「多世界解釈」というものである。従来の解釈では、電子が共存している状態で観測者が観測した後、電子の位置は人間にとって一か所に決まるということであったのが、多世界解釈では、観測

後でも、「二つの状態は残っている」と考える。つまり、人間が、位置Aに電子を観測した世界と、位置Bで観測した世界が分岐する、と考えるのである。この場合、二つの世界が並列しているようにみなせるので、多世界解釈という名がついた。分岐した二つの世界は関係性が切れてしまい、互いに影響を及ぼすことができなくなるのである。これが正しいければ、単なる空想の世界といわれた、いわゆるパラレルワールドも実在することとなる。

つまり多世界解釈とは、「波束の収縮」を持ちださずに、量子論の基本原則だけを使って考える、ある意味で素直な立場だとも言える。素粒子のようなミクロな世界だけではなく、マクロな観測装置や人間も、すべてセットで量子論の対象として考えるのが、多世界解釈の特徴である。ゆえに、シュレーディンガーの猫でいえば、半死半生ではなく、観測前も後も、終始生きている状態と死んでいる状態が共存している、ということになるのである。猫だけではなく、人間に対してさえ、複数の状態が常時共存していると多世界解釈では捉える。では、人間の未来はどう捉えればよいのであろうか。

量子論が誕生する前までは、あらゆる物体の運動は、我々が高校の物理で習ったような「ニュートン力学」で説明がつくと考えられていた。たとえば、ボールの遠投を例にとると、空気抵抗を無視すれば、ボールを投げた瞬間の速さと向き、高さが厳密に分かれれば、地面に落ちる位置は、ニュートン力学によって緻密に計算できる。フランスの科学者ピエール・ラプラスはニュートン力学の考えをさらに発展させ、「仮に宇宙のすべての物質の現在の状態を厳密に知っている生物がいたら、その生物は、宇宙の未来のすべてを完全に預言することができるだろう。つまり、未来は決まっていることになる。」と主張した。しかしながら、「ラプラスの魔物」と呼ばれるこの仮想の生き物も、量子論が台頭してくるに従い、影を薄めることとなる。仮に、ラプラスの魔物が宇宙のすべての情報を把握できたとしても、未来がどうなるかを預言することはできないからである。

しかしながら、その決まっていな未来とは、単なる確率的なもので決まってしまうのであろうか。ミクロの世界ではすべてが確率で決まってしまうという主張に対し、アインシュタインは、「神はサイコロ遊びをしない」といって、そこには厳然たる秩序があると信じて疑わなかった。これに対し、ボーアは、「神がサイコロ遊びをなさらないと、どうしてあなたにはわかるのか」と異を唱えたという。

これはある意味で、両方とも正しいと考えることができる。稲盛哲学の観点から言えば、アインシュタインのいう神の持つ秩序とは、「宇宙の生成発展の意思」だということができるからである。だからといって、神はそれを為さんがための答えを、すぐに人間に教えるようなことはしない。それでは、人間は向上しないからである。ゆえに神は、人間に「自由意思」という偉大な慈悲を与えたのである。

多世界解釈でいえば、人間の「選択する」という偉大な力のことである。Aの世界を選択するかBの世界を選択する力が人間にはあるが、両方とも経験することはできない。しかしながら、神はどちらの方向へも行けるように、あらかじめ道を共存している。その世界すべてを含めて「未来」と考えるなら、確かに未来は決まっている、という言い方もできる。しかし、人間は、自らの選択した世界以外は認識できないため、未来はやはり決まっていはいない、という結論に至るのである。

すべての道はあらかじめ共存している。死と生すらも共存している。どちらの方向に行くこともできるし、それは各自の自由意思である。そこで何の羅針盤も持たずに歩いていけば、

文字どおり確率的な人生を歩み、ゆえに自らに現れる現象も、コペンハーゲン解釈的な、確率的な物質界ということになる。

この点、どの世界を選択するかという場合の稲盛の基準は極めて明確である。宇宙の生成発展する意思・法則に沿っているか、その愛のエネルギーに順応しているかかどうか、ということである。いわば「神の方向を向いているか、向いていないか」という、それだけのことである。しかしながら、その意味するところは非常に深遠である。

さらに稲盛は、常に、「己の才能を一人占めするようなことがあってはならない」と主張する。自分が仮に何かをやらなかったとしても、その世界はいずれ誰かが代わりに選択したのである。ゆえに必ずしもそれが自分である必要はないのである。であるならば、縁あってこの仕事をさせていただいているという謙虚な気持ちを忘れず、自らの才能を、利他の行為に活かすという、つつましやかな気持ちこそが大切ではないのか、と説く。神の方向で選択した後は、この謙虚さで行動し続けることが何よりも大切だということである。⁽⁵⁾ 選択と行動という人間の根幹において、まさに稲盛哲学の基本となるものである。

5. 「色即是空 空即是色」の意味するもの

さらに稲盛は、あの世の存在や転生輪廻の存在についてもしばしば触れている。先ほどの式、 $E=MC^2$ から導き出されるものは、要すれば、エネルギーは物質化し、物質もやがてはエネルギーへ還元される、ということである。雨は川となり、海へ流れて、やがて水蒸気となって雲となり、また雨となるという循環も、ある意味で転生輪廻の一つの姿であり、様々な形において万物は流転するというのは、人間とて例外ではない。

般若心経のいう色即是空、空即是色の意味するものも、この $E=MC^2$ と、根本は同じである。宗教も科学も、その究極の目的は真理の探求にある以上、ある意味で、それは当然ともいえる。

すなわち、前述したように、宇宙空間は絶対的な「無」ではあり得ず、素粒子が沸き立っている「空」のエネルギーの世界である。別に宇宙空間だけではない。我々の身近な空間でも、2枚の金属板A、Bを平行にならべ、1000分の1ミリメートルまで近づけると、粒子の対生成、対消滅の現象があるがゆえに、この金属板は互いに引き合う現象が生まれる。これをカシミール効果という。我々の空間も宇宙空間もすべて無ではなく、同一現象の「空」の世界が広がっているのである。

この空の世界に対し、「色」とは色がついているもの、すなわち物質である。物質とエネルギーは、この宇宙においては一体となって流転している、ということである。これこそが「色即是空 空即是色」の真の意味である。

6. 量子論が織りなす未知の世界

天才物理学者といわれた前述のデビッド・ボームも、現代科学の行き詰まりは世界を細かく分割して扱うデカルト的手法にあるとし、全体を分割しないで捉えるべきだとしている。

ボームは、「現実に見えているこの世界（明在系）の背後に、全体を操っている秩序（暗在系）があり、全体は部分の中に繰り込まれている。この現実世界は、隠された「何か」の投影された姿である。投影された物のなかには、時間・空間・物質のみならず意識も含まれる。暗在系の背後には、暗在系をコントロールし組織化している超暗在系がある。そこには

英知が存在する。暗在系はエネルギーに満ちている」という。

すなわちボームは、「宇宙は物質世界（明在系）と多次元世界（暗在系）からなり、物質世界は多次元世界の反映で存在している。多次元世界には意識がありエネルギーに満ちている。さらに、多次元世界と物質世界を支配している究極次元の存在（創造主）がある」と主張するのである。

このボームの主張は、稲盛のいう、この世とあの世の説明と符合しているように思われる。稲盛は、この宇宙には、我々が智慧を授かる「智慧の蔵」なるものが存在し、そこから人類は英知を授かってきたと主張する。⁽⁶⁾ 明在系に生きる我々も、暗在系からインスピレーションを得ることができるが、これを、あたかも、ラジオの受信機が電波を受信するがごとく、豊富に取り入れることができるのが、いわゆる「天才」と呼ばれる技能の持ち主である。しかし、稲盛は、我々凡人も、純粋な心で誠心誠意、懸命に努力を続けることで、この智慧の蔵から啓示をうけることができると主張する。すなわち、私利私欲を極力取り去り、懸命に努力を続ける時の心の状態こそ、我々凡人も暗在系とつながり得る唯一の方法だということである。

さらに近年、タイム誌「世界で最も影響力のある100人」の一人に選ばれた、ハーバード大学のリサ・ランドール博士は「縦、横、高さ、時間の4次元の他に、異次元がこの同一空間に存在する」と主張するが、それも前述した超統一理論からきている。博士の出発点は、この中で、なぜ重力だけが極端に弱いのか、ということであった。それを解決するのが、博士のいう異次元の存在である。物質を構成している他の3つの力はこの宇宙に留まっているが、重力だけは次元を超えて作用しているから、その力が極端に弱いのだと博士は主張する。

欧州セルンにある、円形加速器「LHC」において、現在、ヒックス粒子発見のための実験が行われている。ヒックス粒子とは、素粒子に質量を与える粒子のことであり、逆にいえば、このヒックス粒子とぶつかる前は、素粒子に質量はないこととなる。この実験で、ランドール博士は、素粒子が幽霊のように消えてしまうことがあるとすれば、その消えた先こそ異次元ということになると主張するのである。

さらに、人間の意識に量子論を取り入れたのが、量子脳理論である。量子脳理論とは、脳のマクロスケールでの振舞い、または意識の問題に、量子力学的な性質が深く関わっていると考える考え方の総称で、心または意識に関する量子力学的アプローチ、あるいは量子意識などとも言われる。スティーブン・ホーキング博士と共にブラックホールの特異点定理を証明し、「事象の地平線」の存在を唱えた理論物理学者、ロジャー・ペンローズは、脳内の情報処理には量子力学が深く関わっているという理論を提示した。これが「ペンローズの量子脳理論」と呼ばれるものである。素粒子にはそれぞれ意識の元となる基本的で単純な未知の属性が付随しており、脳内の神経細胞にある微小管で、波動関数が収縮すると、意識の元となる基本的で単純な未知の属性も同時に組み合わさり、生物の高レベルな意識が生起するというのである。たとえば、コヒーレントとは、水分子の波動がすべてそろったという意味であるが、脳細胞の中で、水分子がコヒーレントになり特殊な光がでており、この波がそろった光の集合体が「心の正体」である、と主張する。ペンローズのこの量子脳理論の結論から考えると、「心＝光」であって、その波動がばらばらではなく、コヒーレントとして集合した時に、「意識」としてでてくる、ということになるのである。

7. 結論

以上、量子論という物理理論を用いて稲盛哲学の根幹を解析してきたが、それは、とりも直さず、人間の思いがこの現象界に与えることの重大さである。我々が目視できるこの世界は大方、ニュートン力学で説明がつくが、物質のミクロの世界では、我々では推し量ることのできない世界が存在している、ということである。

さらに量子論からいえば、自分の思いこそが自分の人生における主人公であり、ゆえに、いささかも消極的な思いを抱いてはならない、ということになるのである。この点、仏教における因果応報の教えも、量子論から説明することは十分可能だと思われる。

III 稲盛哲学と心の探究

1. 心とは何か？

心とは何かと定義することは困難を伴う。なぜかというと、それを扱う学問が殆ど存在しないからである。

たとえば、車を例にとって考えてみる。車には、走る、曲がる、止まるという機能や作用がある。そして、それができるところの車は何なのかというと、これは、エンジンがあり、ブレーキがあり、サスペンションがありと、ガソリンが点火してエンジンがまわると説明できる。また、その構造を研究するために、機械工学という学問も存在する。

一方、心はどうであろうか。心が織りなす作用は無限である。そして、心が思ったり考えたりする機能や作用を分析するために、心理学という学問がある。しかるに、では『それができるところの心とは何なのか？』と問われた場合、車のように明快な説明ができないのである。

この点に関して、稲盛は独自に心の構造を究明するなどからしても、かなり関心があることを伺わせる。⁽⁷⁾ 稲盛の最も尊敬する人物は西郷隆盛であるが、そもそも心に関心を持ったのは、年少の頃に結核を患った際、谷口雅春の著書『生命の實相』を読んだことがきっかけである。しかしながら、稲盛が、心について、科学・哲学の両面から本格的に研究し、成果を自らの経営哲学に取り入れんとしたその対象は、中村天風（以下、天風と略す）の哲学である。特に、稲盛が本格的に心を研究するに当たり最大の影響を与えた本は、天風の『研心抄』であるといっても過言ではない。

天風がどれだけ稲盛に影響を与えたかは、京セラフィロソフィの中にもある、

「私が私淑している中村天風さんは、インドのヨガを極められた、今世紀の日本において、もっとも素晴らしい聖人、あるいは賢人といわれている方です。その中村天風さんも、「有意注意の人生でなければ意味がない」と説いておられ、「研ぎ澄まされた鋭い感覚で迅速な判断をするためには、どんなに些細だと思われるようなことでも、常に真剣に考える習慣を付けていなければならない」といわれています。」⁽⁸⁾

『私はよく、中村天風さんの言葉を引用してお話することがあります。天風さんは、私の人生において、精神的、哲学的な部分に大変大きな影響を与えた方です』⁽⁹⁾

といった記述が散見されることからわかる。また、京セラ社員が使用している本『京セラ 経営12カ条』には、「京セラでは1972年から毎年スローガンを掲げてきましたが、その多くは中村天風さんの哲学から得たものでした。」と記されており、稲盛が毎年のように経営方針として掲げてきたものには、天風の哲学が大きく影響していることは明らかである。さらに盛和塾においても、リーマンショック後の大変な不況下において、企業はどう対処すべきか、という課題について、『強く清らかな心で不況を乗り切る』『正しく純粋で強烈な思いと、ひたむきな努力が事業の成功を約束する』と題して、天風の説く教えを基に何回か講演を行っていることから、稲盛がどれだけ天風の説く心の在り方を強調してやまないかがわかる。⁽¹⁰⁾

そこで本論では、稲盛の経営で最も重視される心の問題について、天風自身が多くの著名な弟子を成功へと導いたこと、また稲盛自身も天風の哲学に真摯に取り組み、結果として、その心を重視する経営が今日彼の企業を隆盛せしめているという事実から、天風の説く心の構造には、真理が多分に含まれているという仮説を立てた上で、心の持つ本質について述べていくこととする。さらに言えば、数少ない心の研究を行った古典をひも解くと、そこには驚くほど天風のそれと共通点があり、これも天風の理論を正当づけるものとして、有益な材料を提供していると思われるので、以下、述べていくこととする。

3. 中村天風の説く心の構造

以下に、天風の講演集『成功の実現』（日本経営合理化協会出版局）をもとに、彼の生い立ちを述べる。

1876年（明治9年）7月30日、東京都豊島郡王子村（現・東京都北区王子）で、父・祐興（すけおき）、母・テウの三男として生まれる。本名を中村三郎といった。父は九州柳川藩主一門の出身で大蔵省抄紙部長の要職にあり、いわゆる良い家柄のもとに育っていったといえる。

やがて九州福岡の修猷館に入学するが軍への投石容疑で退学、頭山満の玄洋社に預けられる。16歳時に、陸軍中佐の鞍持ちとして日清戦争前の満州や遼東半島方面の偵察、調査を行ったという。さらに26歳で参謀本部諜報部員、いわゆる軍事探偵として採用され、特殊訓練を受け満州に潜入し情報収集に尽力した。

2年後の1904年に日露戦争勃発、軍事探偵として目覚ましい活躍をするが、ロシアのコザック騎兵に捕えられ、死刑宣告を受ける。まさに銃殺寸前、橋爪なる同志の投げた手榴弾によって吹き飛ばされ、奇しくも九死に一生を得ることとなった。

29歳に日本へ帰還するも、翌年30歳にして奔馬性肺結核発病、死に直面した。当時、結核に関する最高権威と言われた北里博士の治療を受けるも好転せず、思案の末、アメリカへ行って救いの道を求めることとなる。この間、コロンビア大学で医学を学ぶ。さらにロンドン、フランスへと渡るが、「弱くなった心を強くするにはどうすればいいのか？」「病を治すためにはどうすればいいのか？」という彼の問いを満足させる答えは、ついに得られなかった。

1911年、35歳時に帰郷を決心する。その途上、カイロのホテルにて、偶然にも、ヨガの聖者・カリappa師と遭遇する。同師に連れられ、ヒマラヤ山脈に入り、ヨガの修行を行う。ここで悟入転生の境地を開き、病を治して帰国する。

43歳時、それまでの一切の社会的地位や財産を放棄し、上野公園にて辻説法を行う。以来、次々と全国に支部を設置するも戦争で活動を阻まれることとなる。

終戦後は、精力的に活動を再開し、財団法人・天風会を設立。1966年帰霊、享年92歳であった。

天風のいう心とは、まず二つに大別される。一つは、肉体生命に属している心。もう一つは、精神生命に属している心である。さらに細かく分けると、肉体の方の心が三つに、精神の心の方が二つに分かれる。

肉体の方の心は、第一が物質心、第二が植物心、第三が本能心であり、精神生命の方の二つとは、第一が理性心、第二が霊性心である。物質心は、物のすべてに存在している、物の芯を為す心である。植物心とは、人間でいえば五臓六腑を正常につかさどる心であるが、ストレスとの関連で、その働きに支障をきたす場合がある。この心は、花や木にも存在する。本能心や理性心とは、文字通り、本能や理性をつかさどる心である。

そして、霊性心であるが、これは、後述する陽明学の「良知」や、プラトンの説く「イデア」と、その根本においては同一である。この霊性心を定義すれば、それは、人間の「本心・良心」ということである。

たとえば、桜の花を観た時、全世界の人々が、美しい！素晴らしい！と叫ぶ。別段取り立てて「桜の花は美しい」という理性的教育を施されたわけでもないのに、全世界の人々がそう思うのである。それはなぜかという、桜の花を観て美しいと感じる、「人類共通の美の心」が存在するからである。また、嘘をつくな、正直であれ、思いやりが大事といったプリミティブな倫理観が、国や地域を超えて有効であるのも、やはりそういった人類共通の心が存在するからである。

また、今、道端で札束を拾ったとする。周りでは誰も見ていない。そこで、ここぞとばかりにポケットに押し込んでしまった・・・そういったとき、大なり小なり「こんなことしてよかったのかな？」という、何かうしろめたい気持ちが伴う。これは、やはり、人間には良心があることの現れである。

以上の霊性心というのは、オオカミ少年のような例外でもない限り、およそ人間である以上は、自然に出てくるものである。さらに重要な点は、いわゆるインスピレーションとか靈感と呼ばれるような発想というのは、この霊性心からでてくる、ということである。理性心は論理的思考をつかさどり、その手助けとなるものではあるが、理性心そのものから創造的な発想というのはでてこないことに注意する必要がある。理性心でこれを行おうとすると、いわゆる「策士、策に溺れる」ということになりかねないのである。

「真に世のため人ためになり、真にお客様に喜ばれるような商品を開発し、販売しよう」という思いは、人間の本心・良心にダイレクトに訴えるものである。ノーベル賞を受賞するような優れた業績をあげた学者は、みな様に素晴らしい人格者だということも、これと一緒にある。稲盛が「心を高める、経営を伸ばす」という原則を主張するのも、こういった原理を経営に応用したことが、その理由の一つとして挙げられると思われる。

4. 意識と心

天風は、意識と心を厳密に分けて定義している。厳格に言うと、意識とは、心の働きを指している名称なのであり、心とは、意識の発動する場所なのである。そして、意識とは、肉

性意識、心性意識、靈性意識の三つに大別される。第一の肉性意識とは、肉体に固有する物質心や植物心、さらに本能心から発生する意識である。第二の心性意識というのは、精神生命に存する理性心から発動する意識のことである。第三の靈性意識とは、前述した靈性心より発する特殊意識である。

さらに重要な点が、我々の意識は、この肉性意識、心性意識、靈性意識のいずれも、いわゆる実在意識と潜在意識の二つに分かれて存在しているということである。そして、我々の心理作用の90%までが、この潜在意識の作用で行われているということである。例えば何か考え事をしている時、我々はそのほとんどを実在意識で行っているように感ずるが、その作用の大部分を、潜在意識が助成補綴しているのである。我々がよく、考えに考えても妙案が浮かばない場合に、疲れ果てて一時その事から離れるとか、他の用事をしていたというような時、ふっとそれが出てくるといった現象も、ひとえに、この潜在意識のなせるものなのである。この意味は、潜在意識の中に靈性意識の発現原料を豊富にすれば人格も向上し得るが、肉性意識や心性意識のみを発動し得る原料を多くせしめれば、人間を動物的なものに墮す、ということである。ゆえに、この点に留意すれば、妙案工夫を生み出すことはもちろん、人生は悠々たるものとなり、どんな難事に対しても虚心平気で対処できる、ということなのである。

こういった天風の哲学は、その源流を、彼自身も修めたヨガ哲学等の、古代のインド思想に見ることができる。「八識論」の第五識までは人間の五感覚に基づいたもので、次の第六識は理性を指し、それらを表層意識と称する。第七意識は「マナ識」であり、これが潜在意識に該当する。最後の第八識は「アラヤ識」であり、潜在意識を超えるものである。天風自身は、靈性意識が極限に達すると「対極意識」というものとなり、森羅万象を創り出す宇宙エネルギーたる先天の一气を明確に知覚し得ると述べているが、このアラヤ識とも関連があると思われる。

では、これを実際に行うにはどうすればいいのだろうか。言い換えると、心を統御するにはどうすればいいのであろうか。

そもそも心の中にある煩悶だとか失望だとか悲観とかいうものの殆どは、本能心と理性心との衝突によって起こる現象である。そして、この二つが取っ組み合いをしても、大抵、理性心が本能心に負けてしまうのである。理性心というのは、ものの善悪、邪正、曲直、是非というものは見分けることができる。しかしながら、この理性心には、本能心を統御し、整理する力はないのである。そもそも理性心で本能心が統御できるならば、人生というのは苦労する必要はない。学問が豊富になって、いわゆる学者、識者とならないまでも、常識の中が非常に理知で豊かにされたならば、この本能心を一見整理できるような気がするが、それは困難である。天風は「学んでいよいよ苦しみ、極めていよいよ迷う」という孔子の言葉を引用して、このことを説明し、物の分別がつくほど、人間は苦しくなっていくと説いている。

5. 意志の力

では、その心を統御する最高権能を有するものは何なのかというと、曰く「意志」というものがこれに当たる。すなわち、心の統御はもちろん生命一切の統御を完全に有するのは、この意志というものより以外に絶対ないと天風は説く。

しかしながら、一般的に心理学者のいう「知・情・意」の中の意というものに該当すると

捉えるのは誤りである。これを定義すれば、「真我に属する固有性能」なのである。真我について天風は、「およそ人間の生命の中には、心及び肉体よりも一段超越した、然も厳として存在する実在のものが一つある。それが即ち真我なのである。そもそもこの実在のものというのは、それがかくの如きものであると、形象や色彩で示現する事の出来ないものなので、ただ人々のいわゆる信念的自覚念で思量するより以外に知るよしもないというものなのである」と説く。すなわち、意志とは真我を表示する方便を行うために真我それ自身に隷属するものなので、従って純精神機能的のものではなく、ただその表現が精神領域において行われるという関係上、往々心の作用の一つのように思惟されるに過ぎない。またこの意志の力と「強情」とは全く違うということにも注意を要する。

6. 有意注意と稲盛哲学

稲盛が天風に学んだことは多々あるが、中でもこの「有意注意」に関しては、かなりの影響を受けたようである。それは、このことだけで京セラフィロソフィに一つの項目を設け、京セラではもちろんのこと、盛和塾においても、繰り返しこの重要性を説いていることからわかる。天風によれば、この絶対的権能を持つ意志の力を発現させるためには精神の統一が不可欠とし、その具体的手段として、この有意注意の実践を挙げている。

たとえば、パン！と音が突然鳴ると、皆一様にその方を向く。これは特段の訓練を経なくても誰でも実現できる注意の注ぎ方であり、これを「無意注意」という。対して、「有意注意」というのは、①急いでいる時②慣れきったこと、熟練した事をする時③興味の薄いことをする時④値打ちがないと思えることをする時、といった場合に、意識明瞭で、気を込めて、真剣に取り組むということである。日常行うことには様々なことがあるが、その都度その都度、出てくることに対して、分け隔てなく注意を注ぐ、ということである。その意味で、有意注意とは、始終何かにとらわれている、悩んでいるといった「執着」とは異なる。また、映画を、我を忘れて観ていて、いつのまにか時間が過ぎていた、といった種類の一心不乱とも異なる。あくまで意識は明瞭でなければならない。これが、意志の力を発現するための誰でもできる日常的手段である、と天風は説くのである。稲盛自身、これを日常的に実践し、これによって潜在意識を活性化させ、勘を研ぎ澄まし、心の統御を行っている。特段深山幽谷にこもり滝に打たれなくても、日常で精神統一の訓練はできる、ということでもある。

7. 宇宙と人間とを繋ぐ心

さらに天風は、ヨガ哲学の教えも援用し、大宇宙のエネルギー、すなわち宇宙に流れる靈妙なる先天の一気と、人間の意識体（＝靈魂）とは、心というパイプでつながっている、と説く。これは、先述したボームの暗在系と明在系や、ペンローズ等が取り組む量子脳理論の分野等でも明らかにされつつあることである。先述した神の定義からすると、神とは宇宙を統べる愛のエネルギーであり、法則そのものである。ゆえに、そこから生まれたものはすべて神の子であり、我々人間は、より多く宇宙の無限我をいただいている存在であるがゆえに、「万物の霊長」だということになるのである。また、心とはそれを繋ぐパイプの働きを行うものであるので、当然、そのあり様で宇宙の気を受け入れる分量にも相違がでてくる、ということになる。ゆえに、これが、人間の健康はもちろん、運命にも絶大なる影響を与えるということになるのである。

8. 陽明学と天風哲学

以上は、天風自身が、ヨガで得た悟りをもとに理論的且つ科学的究明を加えた結果出てきたものであるが、心について説いた数少ない古典をひも解いてみると、そこには天風哲学と比べてみても、驚くほど多くの共通点があることに気づく。これは、天風に倣った稲盛の経営の成功という事実と同様、天風の説く心の構造の正しさを実証する上でも有効であると思われる。その代表ともいべきものが、陽明学である。

いうまでもなく陽明学とは、王陽明の説く思想のことであるが、その基本理念とは、以下の七つである。

① 格物

朱子学で格物を「物にいたる」と読むのに対し、陽明学では、「物をただす」と読む。物を正し、不正を去れば、それがすなわち天理にかなうことだ、という意味である。天風の強調する「正義の実行」もこれと同様である。稲盛のいうプリミティブな倫理観の実践にも共通するものがある。

② 良知

人間の本心良心のことであり、これが、天風のいう靈性心にあたる。朱子学にいう「物を窮める」ということ以上に良知を重視するということは、天風でいえば、心性意識で心は安心立命できるものではなく、靈性意識を豊富とする潜在意識の活性化によってこれを行うことができるというのと同様である。

③ 知行合一

非常に誤解されていることであるが、知行合一とは、言行一致とは全く異なる。理解した後は実践あるのみ、ということとも異なる。行動した結果が自らの知と一致していなければ、それは真の知ではない、ということである。天風が、「親切にしたいと思って行った親切は尊い。しかし自らが行った行為が結果としていつも親切になっている、ということがより尊い。」と述べているのと同様である。孔子が、「心の欲する所に従いて矩（のり）を超えず」と述べている境地も、知行合一と根本は同じである。そもそも、知と行とは分けられるものではないというのが、陽明学の説くところである。

④ 万物一体の仁

自分と他とは別々の存在ではなく、元をたどれば、宇宙に充満している「空のエネルギー」からでてきたものである。その点からいえば、私はあなたであり、あなたは私でもある。他人の痛みを、真に自分の痛みとして捉える事のできる人とは、そういう気持ちを持った人のことである。天風のいうように、その一つの世界で、我々人間も、心をパイプとしてみな繋がっている存在なのである。

⑤ 心即理

朱子学では、心を「性」と「情」に分け、さらに情が墮落すると欲となる、とする。ゆえに、絶えず情を統御し、人間の本性たる姿である性に戻す努力が必要とされるが、陽明学は、心そのものを天理とした。天風でいえば、本能心といえども人類の存続や生命の維持には不可欠の心であり、決して否定し卑しむべきものでもなく、むしろその本能心を整理し、統御することが真理にかなうことと説いているのと同様である。

⑥ 事上磨錬

書齋の学問ではなく、日常の仕事すべてが修行であり、実学であるとする。天風の説く、日常の有意注意の実践で意志の力が増す、ということと同様である。稲盛が、禅宗においても禅のみが修行ではなく、朝の煮炊きや掃除等々、一見雑事と思えることもすべて修行であると説くのも、これと関連していると思われる。

⑦ 天理・人欲

天理、すなわち正しい道ということであり、人欲とは文字通り人の持つ欲ということである。王陽明が、排すべき人欲として挙げたのが、貨（財産）、色（性欲）、利（利益）、名（名声）の四つである。これら人欲を排して天理に従うことを、天理人欲という。この点、天風の説く欲の定義はユニークである。「欲を排したい、欲を捨てたい」と思うこと自体が、すでに一つの欲であるとする。その意味で、人間は絶対に欲を排することはできない。しかしながら、王陽明のいう人欲以外に、人間には、「世のため人のために貢献したい」という、霊性心から生まれる欲もある。これは燃やせば燃やすほど楽しい欲望であり、この欲望を炎と燃やせ、というのである。それをすることによってまた、自ずと人欲は制御されていくのである。

また、付け加えれば、西洋ではプラトンが、イデア論として、天風の霊性心や王陽明の良知と近いことを説いている。ソクラテスが問う、正義とは何か？といった根本的な問いに人々は答えられず、自らの無知を悟ることとなるが、プラトンはこの「～とは何か？」といった問いに、理論的な回答を与えようとした。

正義とは、具体的な行為の中でしか現れない。その行為は様々である。しかし、その様々な行為の中に、人々は共通した「正義」のイメージを用いて理解しようとする。であるがゆえに、その行為は万人から称賛されるのである。すなわち、その行為は数ある正義の行為の一つに過ぎないし、その意味では不完全ではあるが、それを正義ある行為せしめている「正義の本質」を、正義のイデアというのである。

さらにいえば、この世界のものはすべて、より良きものを目指している。しかも、それぞれが最後に到達すべきものはイデアであるから、各イデアは「善」であらねばならない。それゆえ、イデアの中のイデアは「善のイデア」と呼ばれるのである。それは、すべての存在の根拠であり、我々が様々な行為や現象を理解しようとする際の、認識の根拠となるものである。

9. 結論

天風の説く心の構造と役割については、心の本質を扱った陽明学やイデア論等と比較してみても、数多くの類似性が見てとれる。また、それを稲盛が、心の経営を構築するにあたり、かなりの程度取り入れ、彼自身が多大な成功を修めていることからしても、中村天風の心の解明は、単に経営のみならず、あらゆる分野で通ずる、普遍性を持った哲学であるといえよう。

引用文献

- (1) 京セラフィロソフィ P228(稲盛和夫著 盛和塾事務局発行)
- (2) ホーキング、宇宙のすべてを語る P32(スティーブン・ホーキング著 ランダムハウス講談社)
- (3) 稲盛和夫の哲学 P16(稲盛和夫著 PHP刊)
- (4) 超進化時代の開運法 P87(五島秀一著 文芸社刊)
- (5) 生き方 P128(稲盛和夫著 サンマーク出版)
- (6) 同掲書 P32
- (7) [盛和塾]通巻102号 特集・塾長講話 P20(発行 盛和塾 2010年)
- (8) 京セラフィロソフィ P272(稲盛和夫著 2009年盛和塾事務局発行)
- (9) 同掲書 P401
- (10) [盛和塾]通巻93号 P2 同99号 P34(発行 盛和塾 2010年)

参考文献

- リサ・ランドール _ 異次元は存在する(NHK未来への提言)
(リサ・ランドール原著 NHK出版)
- 皇帝の新しい心
(ロジャー・ペンローズ著 みすず書房)
- 因果性と相補性
(岩波文庫・ニールス・ボーア論文集)
- 成功法則は科学的に証明できるのか？
(奥健夫著 綜合法令出版)
- 運命を拓く
(中村天風著 講談社文庫)
- 成功の実現
(中村天風述 日本経営合理化協会出版局)
- 研心抄
(中村天風著 財団法人天風会刊)
- 王陽明 伝習録
(王陽明著 中公クラシックス新書)
- プラトンの哲学
(藤沢令夫著 岩波新書 1998年発行)
- 稲盛和夫の実学
(稲盛和夫著 日経ビジネス文庫)
- 働き方
(稲盛和夫著 三笠書房)
- 成功への情熱
(稲盛和夫著 PHP文庫)
- 稲盛和夫のガキの自叙伝
(稲盛和夫著 日経ビジネス文庫)
- アメーバ経営

- (稲盛和夫著 日本経済新聞社)
- 君の思いは必ず実現する
(稲盛和夫著 財界研究所刊)
 - 心を高める 経営を伸ばす
(稲盛和夫著 PHP刊)
 - 敬天愛人 -私の経営を支えたもの-
(稲盛和夫著 PHP文庫)
 - 人生の王道 -西郷南洲の教えに学ぶ-
(稲盛和夫著 日経BP社)
 - Newton 別冊『「無」の物理学』(2010年発行)
 - Newton 別冊『量子論』 (改訂版 2010年発行)